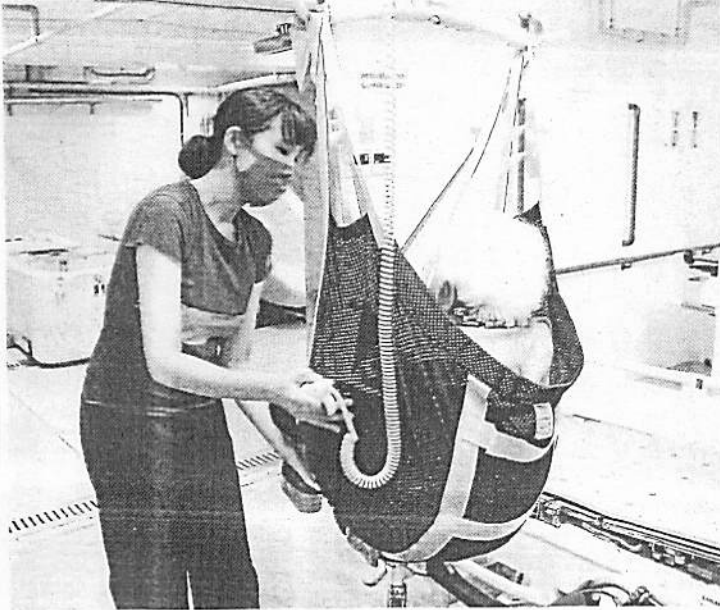


器具を使った入浴介助＝神戸市北区山田町小部、六甲の館



新型コロナウイルスの収束が見えない中、病気の患者や要介護者を抱きかかえない介助「フーリフトケア」に注目が集まっている。積極的に器具を使って医療・介護職員の腰痛を防ぎ、人同士の接触機会も減らして感染リスクを下げる。日本フーリフト協会（神戸市兵庫区）は、兵庫から「新しい生活様式のケア」を発信する。

（佐藤健介）

神戸に協会

コロナ禍 介護現場も「密」回避

# 新様式「フーリフト介助」

## 抱えず器具活用、負担軽く

「フランクみたいやなあ。体を触られへんし、痛くないわ」  
特別養護老人ホーム「六甲の館」（神戸市北区）。入所者の浜本カズ子さん（94）は、車いすから入浴用のストレッチャーへリフトで移されながら、笑みを浮かべる。  
いつも楽しんでいるお風呂。湯船に漬かるには、車いすからストレッチャーに移乗する際に介護スタッフ2、3人が抱えなくてはならない。だが、リフトならリモコンを使って一人で操作できる。  
「移動介助では介護スタッフに強く抱えられた施設利用者が『痛い、痛い』と訴え、体にあざができることもあった」と、同ホームの溝田弘美施設長（56）は話す。

同ホームは、日本フーリフト協会のマッチング事業を活用し、介護リフトの開発企業「ウェル・ネット研 究所」（伊丹市）に6月下旬から無料で借りた。溝田施設長は「職員も『楽になった』と喜んでいる」と評価する。

フーリフトとは、人の力で体を持ち上げたり、ベッドで引きずって動かしたりしない手法。同協会は、オンラインで同ケアを学んだ保田淳子代表（49）が2009年に立ち上げた。6月には「2020フーリフトチャレンジ・プロジェクト」と銘打った事業を企画。賛同する企業20社以上のリフトやシート、車いす、クッションなどの器具一覧をホームページで公開し、現場のニーズを企業側に伝える。使い方を学べる動画教材も提供する。

「介護従事者は高齢者を感染させないかと不安を募らせている。ストレスは身体にも影響し、ミスを引き起こしかねない。安全に働ける環境を支援できれば」と期待する。

特別養護老人ホーム「くろみ」の里（洲本市）は6月から「フーリフトインテグレーション」と題した手引をホームページで公開している。同ホームは他施設の職員も交えた勉強会を開くなどフーリフトを重視しており、ノートはその成果をまとめたものだ。

今はコロナ禍で勉強会を開けない状況だが、担当者には「介助者を減らせる上、過度の接触も避けられる。介護利用者の健康的な生活を支える技術として学んでほしい」と話す。

### 神戸新聞分

困難が工夫を産み、そこに新たな技術や生活様式からの発見がある。  
「ピンチはチャンス」促す次第で可也。